

たかがアームリフター、されどアームリフター

トーンアームのアームリフターで問題が起きるなんて夢にも思いませんでした。
アームリフターの役割はとてもシンプル、単にトーンアームを上げ下げするだけです。
音質に影響を与えるようなコトも考えられません。
しかし、どうも安全にレコード再生を行うため、使い勝手の良いレコードプレーヤーシステムを実現させるためには重要なパーツだという事が分かってきました。

現在、使用している ViV Laboratory のトーンアーム Rigid/Float のアームリフターでは当初から次の様な問題が発生していたので、アームリフターのシリンダーの上下だけは調整していました。

1 カートリッジシステムを入れ替えると、レコードの内周側でアームリフターのアーム受けにアームが接触して針先が浮いてしまうことがある（→シリンダーを少し下げる）。
この他、

2 レコードによっては再生が終わった時に、アームがアームリフターのアーム受けの守備範囲から外れてしまい、アームのリフトアップが出来ないことがある。

更に、

3 レコード再生を開始するために針先をリフトダウンする際、針先が外側へ少し流れることが多い。

そして遂に発見したのです、アーム受けの右側に小さな小さな六角ネジがある事を。どうやらこのネジを緩めるとアーム受けを水平に回転させる事が出来るようなのです……。

アームリフターのタイプ：

まずはどのようなタイプのアームリフターが世の中に存在するのか、ざっと調べてみました。

- 1 **SME M2-12R**（これはナイフエッジ支持方式ではありません）はセンター支持方式。アーム受けのセンターをシリンダーで上げ下げします。
- 2 デノン **DP-A100** はアーム受けの片側をシリンダーで上げ下げする片側支持方式。さらにアーム受けの反対側にはアーム受けの回転防止ピンがあり、このピンが穴に刺さっています。
- 3 **Rigid/Float** のアームリフターは片側支持方式、アーム受け回転防止ピンはありません。
- 4 単体で販売されているアームリフター
 - (1) 山本音響工芸の **AL-2AL-2** は片側支持方式、ちなみに¥9,999（税込）
 - (2) **GLANZ** の **MH-L4S** も片側支持方式、ちなみに¥28,500（税抜き）

結論から言えば、アームリフターは片側支持方式が多いということになります。

アームリフターの役割：

改めてアームリフターの役割について考えてみます。

- 1 針先をレコード盤上の狙った所へ垂直に正確に降ろすこと。
(しかしアームリフターによっては外側へ1～2mm流れることがあります)
- 2 針先をリフトアップした場合、針先とレコード上面の間隔が7～8mmに調整出来ること。
これはリフターのレバーで確実にリフトダウンのコントロールが出来る範囲がその位だからです。
あまり間隔が広いと、リフトダウンの際、最後の方は「ストン」と落ちてしまいます。
あまり間隔が狭いと、外周部に「反り」がある盤の場合、針先が盤と接触します。
- 3 レコード再生中、リフターのアーム受け部分とアーム（またはアームに付属する金具）との間隔が（レコード盤上の何処に針先が移動しても）数ミリはあること。
- 4 レコード盤の最内周部へ針先が行った場合でも確実にアームのリフトアップが出来ること。

アームリフターの調整：

お使いのアームリフターに調整可能な部分がある場合、次のように調整してみても如何でしょうか。ただし、セットもののプレーヤー・システムでアームリフターの調整部分が全く無い場合はもうお手上げです。そのまま使うしかありません。

- 1 アームリフターのシリンダー部分の高さが調整出来るもの
1.5mm前後の六角レンチでナットを緩め、アームリフターでアームを跳ね上げた場合針先とレコード盤との間隔が7～8mmになるように高さを調整する。
- 2 アーム受け部分が水平方向に回転可能なもの
0.89mmの六角レンチでナットを緩め、
(1) リフトダウンの際、針先があまり外側へ流れないように、
(2) また、レコード再生終了後、アームをリフトアップする際、アームがアーム受けから外れないようにアーム受けを上から見て少し右回りに調整する。

Rigid/Floatのアームリフターではこうした調整が必要でした。

なお、前述したSME M2-12Rの取説には「アームリフターの昇降時に、アームが外側に流れる場合はリフターのラバーパッドが汚れていることが考えられます。」という記述がありました・・・。

以上は本当に細かな事柄です。しかしきちんと調整すれば針先の破損やレコード盤を傷めるといふ事故を未然に防ぐことが出来るのではないかと思います。